

ダルクにおける「回復」の社会学的検討Ⅱ（3）

——「回復」概念の運用ヴァリエーションと特殊性——

東京大学 森一平

1 目的

本報告の目的は、ダルク (Drug Addiction Rehabilitation Center) において用いられる「回復」概念の内実と、その特殊性を明らかにすることである。薬物依存者に対してふつう期待される「回復」とは、なによりもまず「断薬」——クスリを使わずにいられること——であるだろう。しかし、ダルクで用いられる「回復」概念は「断薬」をその一要素として含みつつも、決してそれに尽きるものではない。このことはすでにある程度語られてきたことではある。とはいえ、それが（断薬だけでなく）何であるのかということは、データをもとに、つまりダルクメンバーたちの実際の運用にそくして明らかにされてきたわけではない。本報告はこの空白を埋めようとする。

2 方法

本報告で用いられるデータは、ダルクメンバー（含スタッフ）に対するインタビュー録音の文字起こしであり、分析の方法は概念分析（酒井ほか編、2009）である。以下、その詳細について述べる。報告者は、Xダルクのメンバー11名、Yダルクのメンバー12名、合計23名のインタビューデータから、「回復」概念が語りのなかで用いられている事例を網羅的に収集した。収集された事例はおよそ400例である。次いでこの約400例を、直観的な理解にもとづきながら「回復」概念の運用形態ごとに分類し、そのうえでそれぞれの「回復」概念がどのような概念のネットワークに埋め込まれているか（他のいかなる概念と結びつけられているか）を検証していった。

3 結果・結論

分析の結果、明らかになったのは次のことである。ダルクメンバーたちの語りのなかで、「回復」概念はたしかに、一般的な期待と一致するかのよう「断薬」や「クリーン」、あるいは「クスリへの欲求が入らなくなること」を指示するものとしても用いられていた。他方でしかし、ほとんどの事例において「回復」概念は、「断薬」を指示する以外のしかたで用いられていた。

例えば「回復」概念は、「生き方」や「考え方」の変化をさすこともあれば、「社会復帰」や「自立生活」をさすこともある（これらは断薬に尽きないポジティブな変化を指示する用法だ）。「回復している」ことの自己判断の困難さを表現する場合もあれば、「回復した」という達成帰属の不可能性を表現する場合もある。「回復」に必要な要素や方法論と結びつけられることもあれば、「回復」する／しないという区別が特定の「態度」や「構え」に結びつけられることもある。

そして「回復」概念は、それぞれがただ様々な論理のもとで用いられているだけでなく、そうした様々な用法同士がたがいに論理的に結びついてもいる。例えば「回復」の達成帰属の不可能性は、第1に「回復」が原理的には終わりのない「人間的成長」と結びつけられうるものであることの帰結であるし、第2に「回復」があくまでメンバーたちそれぞれの課題と結びついた営みであるとされながらも、他方でその自己執行が困難であるとされていることの帰結でもある。

ダルクの実践を理解するためには、その特殊な「回復」概念についての理解が欠かせない。それゆえ本報告の知見は、ダルクで日々おこなわれていることを見通すための一助となるだろう。

文献

酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編、2009、『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版。